

頭の弁の、職に参りたまひて、物語などしたまひしに、夜いたうふけぬ。「あす御物忌

みなるにこもるべければ、丑になりなばAあしかりなむ。」とて、参りたまひぬ。

【 】【 】

つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、「今日は残り多かる心地なむする。夜を通して、

昔物語も聞こえ明かさむとせしを、鶏の声に催されてなむ。」と、いみじう言多く書きた

まへる、いとめでたし。御返りに、「いと夜深くはべりける鳥の声は、<sup>1</sup>孟嘗君のにや。」

と聞こえたれば、たちかへり、「『孟嘗君の鶏は、<sup>2</sup>函谷関を開きて、三千の客わづかに

去れり。』とあれども、これは<sup>3</sup>逢坂の関なり。」とあれば、

「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関は許さじ

心かしこき<sup>4</sup>関守はべり。」と聞こゆ。また、たちかへり、

1 孟嘗君 (？前二七九?) 中国の戦国時代、斉の宰相。秦で捕らわれていたが、従者に鶏の声を巧みにまねる者がいて、関所を開門させ、無事脱出できたといわれる。(関所の門は一番鶏が鳴くまで開かないきまりだった。)

2 函谷関 秦への入り口にあった関所。日没に閉じ、鶏の声とともに開けた。

3 逢坂の関 現在の京都市と滋賀県大津市の境にあった関所。「逢坂」に「逢ふ」の意を掛ける。↓通行が自由だった。

4 関守 関所の番人。ここでは自分のことをさす。



【 F いかにか心憂くつらからまし。今よりも、さを頼みきこえむ。】などのたまひて、後に、

経房の中將おはして、「頭の弁はいみじうほめたまふとは知りたりや。一日の文に、あり

しことなど語りたまふ。 a 思ふ人の b 人にはめらるるは、いみじううれしき。」など、ま

めまめしうのたまふもをかし。「うれしきこと二つにて、かの G ほめたまふなるに、また、  
【 【

思ふ人のうちにはべりけるをなむ。」と言へば、「それ、めづらしう、今のこのやうに

も喜びたまふかな。」などのたまふ。

問一 傍線部 A～G を口語訳しなさい。

問二 傍線部 a、b とは具体的に誰か。

a 【 b 【

問三 波線部「うれしきこと二つ」とは何と何か。

【 【

※清少納言は、和歌の家に生まれながら、父元輔（梨壺の五人のひとりであり、『後撰和歌集』の撰者のひとりであった歌人）の名をはずかしめないために、和歌はつとめて詠まないようにしていた。が、この「夜をこめて」の和歌は、その数少ない和歌の中で最も有名なもの。

解答

問一 A きつと悪いでしょう (きつと不都合でしょう)

B たいそう深く頭(額)までもついて

C 返歌もできずになつてしまった

D とてもよくない

E お礼を申し上げたい

F どんなに不愉快でいやなことでしょう

G ほめなさるとかい

問二 a 清少納言

b 藤原行成

問三 藤原行成がほめてくださること

経房の中将の愛する人の中に加えられたこと